

児童が自ら取り組もうとする授業づくり  
～自己効力感を高めるための支援を通して～

塩竈市立第二小学校 教諭 中嶋 輝

### 1 主題設定の理由

平成29年に改訂された学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を重要視しており、文部科学省は「主体的な学び」の視点を“学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。〔1〕”としている。したがって、学校の教育活動を進めるに当たっては、児童が自ら活動に取り組もうとする姿を目指した授業づくりが必要となる。

本校の特別支援学級（知的）には児童6名が在籍しており、日頃から教員間で連携を図りながらきめ細かい指導を行っている。しかし、児童にとっては自分の近くに常に大人がいる環境であり、教員を頼りやすい環境であるとも言える。難しいと感じたときやうまくできそうにないという見通しをもったときには、すぐに大人の手を借りようとしたり、主体的に活動に取り組めなくなったりすることもある。そこで、自ら取り組もうとする授業のあり方を探り、児童が自らの力を発揮して学習活動に取り組めるようにしていきたいと考え、本主題を設定した。

### 2 研究の目標

児童が自ら取り組むための工夫について、授業づくりを通して検証する。

### 3 研究仮説

教師が児童の自己効力感を高める指導を行っていくことにより、児童は学ぶことに興味や関心をもち、自ら学習活動に取り組んでいくことができるであろう。

### 4 研究対象

塩竈市立第二小学校  
知的障害学級（「かもめ学級」） 6名  
〔第4学年 男子2名 女子1名〕  
〔第5学年 男子2名〕  
〔第6学年 男子1名〕

### 5. 研究計画

#### （1）研究期間

平成31年4月～令和2年3月

#### （2）研究計画の概要

##### ①研究内容

- 児童が学びに向き合うための理論モデルの作成と授業づくり
  - ・自己効力感を高めるための支援の検討
  - ・児童が学びに向き合うための理論モデルの作成
- 理論モデルを取り入れた支援の実践
  - ・支援の実践と児童の変容の記録
- 実践の検証
  - ・児童の変容と支援の関連性の整理・分析
  - ・理論モデルの検証

##### ②研究計画

段階	期間/期日	主な授業実践	主な内容
I	4月～7月	・かもめ商店をしよう	○理論モデルの検討 ○授業実践
II	8月～12月	・かもめマーケットをしよう	・授業計画 ・活動の様子をVTRに撮影 ・支援と児童の変容との関連性を整理分析
III	1月～2月	・かもめカフェをしよう	○理論モデルを基に実践を検証
IV	3月		○実践結果の分析と考察

### 6. 研究の概要

#### （1）自己効力感について

人間は、何らかの活動に取り組む際「自分ではできそうだ」という気持ち（自己効力感）

をもっていなければ行動を起こすことができない。自己効力感を提唱した心理学者アルバート・バンデューラによると、人間が自分からやってみようとするためには自己効力感を高めていくことが必要であり、「自分で実際に行い、成功経験をすること（『遂行行動の達成』）」、「うまくやっている他者の行動を観察すること（『代理的体験』）」、「他者からの説得的な暗示を受ける（『言語的説得』）」、「生理的な反応の変化を体験する（『情動的喚起』）」が大きな影響を与えるとしている。学習活動においても、「できたことがある」という成功経験をもっていること、友達の活動の様子を見ること、教師や友達に応援されたり、励まされたりすること、安心のできる環境の中にいることは重要な要素であり、自ら活動に取り組もうとするために必要な要件だと考える。

## (2) 児童が学びに向き合うための理論モデルについて

児童が学びに向き合うためには、本人の能力だけではなく、課題への興味関心や活動に対して「できそうだ」と思う自己効力感が必要だと考える。課題への興味関心は、児童の実態に合わせた教材の工夫等によって高めていくことができるが、自己効力感には児童の内面の問題であり、それを高めるための支援が必要となる。そこで自己効力感を提唱した心理学者アルバート・バンデューラによる自己効力感を高める4つの要素をもとに、支援の方法を検討した。

### ① 遂行行動の達成

自己効力感を高めるためには、成功した経験のある事象に関して過去の経験を振り返り、

「前はできたから、今の自分もできるはず」と客観的に捉えられることが必要である。そこで、各学習に系統性をもたせ、成功経験のある活動を学習の中に取り入れるようにする。

### ② 代理的体験

うまくやっている他者の行動を観察することで自己効力感を高められることから、ここでは他者と自分とを客観的に比較する「思考力」が必要になる。そこで、活動に取り組む順番や他者の動きが見やすい位置に座るようにするなどの環境の調整を行い、活動の見せ方や活動の流れ、場の設定について工夫をする。

### ③ 言語的説得

他者からの説得的な暗示を受けることは自己効力感を高めることにつながる。そこで、児童が「やってみよう」「できそうだ」と感じられるように「適切な評価」「激励」をするとともに、進歩・改善したことについてフィードバックを行うようにしていく。

### ④ 情動的喚起

児童が自分の力を発揮するためには、自分の心の状態を客観視し、リラックスしていることが大切になる。児童が「できない」という精神的な思い込みから解放できるような安心感を与えられるよう、環境の設定や言葉掛けを行っていく。

以上のことから、活動の「事前段階」「遂行段階」「事後段階」のそれぞれに自己効力感を高める支援を盛り込んだ理論モデルを作成した。(図1)

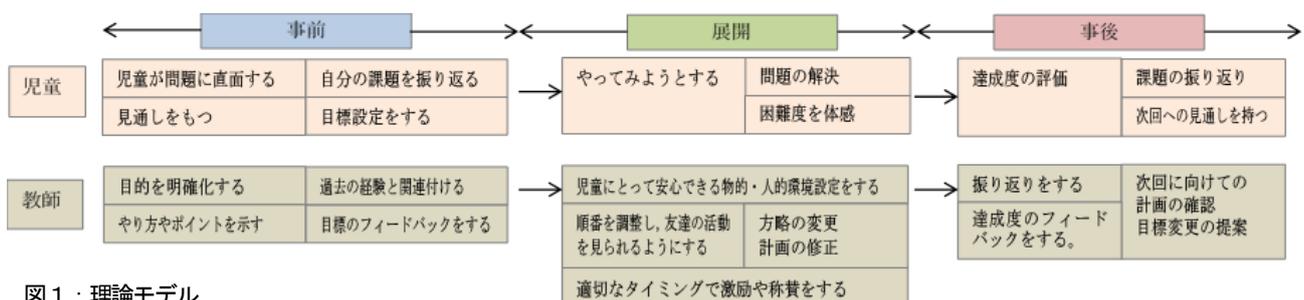


図1：理論モデル

## 7. 実践の経過と結果

### (1) 実践1：生活単元学習「かもめ商店をしよう」

①活動期間 5月（5時間扱い）

②活動場所 本校会議室

#### ③活動の概要

学校のために働くことを目標に、全校分のノート（運動会の記念品）の準備に取り組む。前年度にも同様の活動を行っているが、今年度は、複雑なシールの貼り方に取り組む。

#### ④活動の経過

##### <事前>

前年度にも同じ活動に取り組んでいるため、前年度の活動の様子をVTRで提示すると見通しをもち、児童は以下のような内容の目標を設定した。

- ・80冊分を完了する。
- ・丁寧にシールを貼る。

##### <展開>

グループを2つに分け、互いの活動の様子を見られる場の設定にしたところ、すぐにやり方を理解して取り組むことができた。

Aグループは自分たちで工夫をし、それぞれ役割分担をしての作業に切り替えたため効率が上がり、児童の予想よりも早く目標が達成された。教師が「あとどのくらいできそうですか」と尋ねると「半分の時間で80冊終わったので、あと80冊できます」と自分たちで計画を修正できた。

Bグループは思い通りにシールを貼ることができず、作業速度が遅くなる児童がでた。教師がすぐにシールの貼り方、貼る場所の確認や激励の言葉掛けをすると、その後も最後まで頑張ろうとすることができた。



図2：Aグループの様子

図3：Bグループの様子

##### <事後>

ワークシートを用いてその日の振り返りを行ったところ、児童は以下のような反省をもつことができた。

- ・目標を達成できてよかった。
- ・次はもっとシールを貼りたい。
- ・シールをまっすぐに貼るのが難しかった。
- ・3枚はがれた。

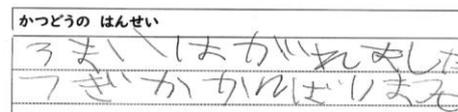


図4：児童Aのワークシート①

Aグループの児童は「うまくできた。」という感想をもつ児童が多く、Bグループは難しかったことや失敗したことを記入する児童が多かった。

##### <次時の学習>

前時と同様の流れで学習を行った。事前に前時の学習を振り返ると、Aグループの児童は全員「〇〇冊分を完成させる」という「数」に関する目標を立てた。一方、Bグループの児童は「丁寧にやる」「失敗しないようにする」など、「質」に関する目標を立てた。

どちらのグループも前時の経験から作業効率が向上し、目標を達成することができたが、Aグループの方がより意欲的であった。

#### ⑤結果

どの児童も活動の経験を振り返ることで、適切な目標設定をすることができた。目標をもつことやグループで友達と一緒に活動することは、児童の「やってみよう」という気持ちにつながった。さらに、Aグループのようにうまく作業が進んだ児童は、「もっとやりたい」という気持ちをもち、自ら進んで活動したり、よりよい方法を探しながら取り組んだりすることができた。

一方、Bグループはシールのずれの許容範囲が不明確であったことで活動が滞ったが、教師がやり方を明確化し、さらに激励をすることで「頑張ろう」と気持ちを切り替えるこ

とができた。

前時の成功経験があったAグループは、次時の学習でも「もっとたくさんやりたい」「もっと上手にやりたい」と進んで活動に取り組むことができた。

## (2) 実践2：生活単元学習「かもめマーケットをしよう」

①活動期間 10月, 11月(15時間扱い)

②活動場所 教室, しおがままちのえき

### ③活動の概要

お客さんによりよい製品を届けることを目標にハーバリウムの製作と校内・校外での販売に取り組む。ハーバリウムの製作, 校外での販売は全員が初めての経験である。

### ④-1活動の経過(製作)

#### <事前>

販売会までの日程をカレンダーで示し, 製作の仕方を教師が示範すると, 児童は活動の流れや手順の見通しをもつことができた。児童は以下のような内容の目標を設定した。

- ・やり方を覚える。
- ・丁寧に飾りを入れる。
- ・5個以上作る。

#### <展開>

全員の活動の様子が見えるように場の設定を工夫した。また, ハーバリウムに入れる飾り花やビーズの数を3個と明確化した。

どの児童もやり方を理解し, 飾り花の組み合わせや色合いを工夫するようになった。児童Bは「ビーズの数を3個以上にしたい」と話すなど, 児童から製作の自由度を高めてほしいという要望がいくつかあった。



図5：児童Bの様子

#### <事後>

ワークシートを用いてその日の振り返りを

行ったところ, 児童は以下のようなことを書いた。

- ・きれいに作れた。
- ・完成品を想像しながら作れた。
- ・もっとやりたい。
- ・飾りを増やしたい。

次回にむけてもとやりたいです

図6：児童Cの反省

### <次時の学習>

前時の児童からの要望を受けて, 自由に飾りを使えるようにした。すると, すべての児童が「きれいな製品を作る」とし, 児童同士で色合いについて相談し合ったり, 上学年の児童が下学年児童にアドバイスをしたりした。

### ④-2活動の経過(校内販売)

#### <事前>

販売会の前に「接客は何をするのか」「お客さんが楽しく買い物をするために何ができるか」と問うと児童は図7のように考えることができた。

「接客」ってなにをするの？

・いらしくいませ。  
・ついでに買いました。  
・お金のいれかた。  
・お待ちしました。  
・また来てくださいね。

あなたはおきやく様が楽しく買い物をするために何ができますか？

・ネがお  
・元気よく  
・優しく  
・大きな声で  
・ていねいにゆっく(り)入れるのやさしく

はんばい会の目標

元気よく大きな声でネがおでやさしくやる。

図7：児童Dのワークシート②

#### <展開>

校内販売ではどの児童も目標を意識し, 大きな声で接客したり, 丁寧に商品の説明をしたりすることができた。

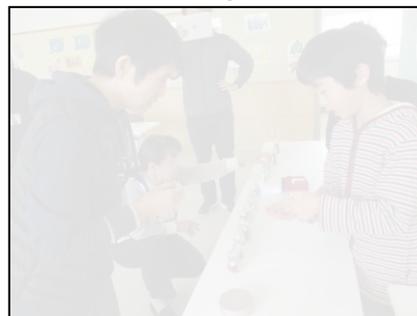


図8：校内販売会の様子

### <事後>

VTRを用いて、販売会の振り返りをしたところ、児童は次のようなことに気付くことができた。

- ・袋に入れるのが難しかった。
- ・よい姿勢で長い時間立つのが大変だと分かった。
- ・Eが暗算でおつりを計算できていてすごいと思った。

### ④-3 活動の経過（校外販売）

#### <事前>

校内販売会での児童の気付きを振り返ったところ、児童は以下のように目標設定をした。

- ・お金の計算をがんばる。
- ・寄りかからないでまっすぐ立つ。
- ・Fのように大きな声で挨拶をする。

#### <展開>

どの児童も緊張した様子であり、校内販売会に比べて声の大きさは小さくなったが、顔見知りの客が来店したことで児童Fの声が大きくなった。それをきっかけに他の児童の声も大きくなり、笑顔での接客ができるようになった。



図9：校外販売会の様子

#### <事後>

帰校してからタブレットPCを用いて、販売会の振り返りをしたところ、児童は次のような内容の反省をした。

- ・自分は緊張して声が出なかったけど、Fが大きな声で頑張っていた。
- ・たくさんお客さんが来て焦ってしまった。次は落ち着いてやりたい。
- ・失敗も多かったけど楽しかった。

### ⑤結果

製作では飾りの数を固定するなどの制約を設けたが、制約を取り払って自由度を高めると、より意欲的に活動に取り組めた。また、場の設定を工夫したことで児童同士の関わりが増え、相談したり教え合ったりする場面が見られた。

販売会は、事前にスモールステップで自分自身の目標について考えるようにすることで、活動中も意識できた。販売活動は校外よりも校内の方が本来の力を発揮できることが多かったが、どちらの販売会でも児童それぞれが友達から刺激を受けながら取り組めた。事後の振り返りではVTRを使用することで、客観的に自分の動きを見ることができた。さらに、友達の動きにも目が向くようになり、友達の頑張りについての感想が増えた。

### (3) 実践3：生活単元学習「かもめカフェをしよう」

①活動期間 1月、2月（9時間扱い）

②活動場所 本校会議室

#### ③活動の概要

お客さんを笑顔にすることを目標に接客について考える。当日は登下校の安全サポーター等呼び、コーヒーやお茶を提供する。毎時間、児童はワークシートを用いて目標に対する自己評価を行い、教師の評価との比較を行う。

#### ④活動の経過

##### <事前>

VTRを通して、かもめマーケットについて振り返った。その上で、本活動の目標設定をしたところ、児童は以下のように考えた。

- ・販売会では焦ってしまったので、落ち着いて丁寧にやりたい。
- ・販売会では疲れて寄りかかってしまったので、姿勢に気を付ける。
- ・販売会では声が小さくなったので、大きな声で接客をしたい。
- ・かもめマーケットでできなかったことを頑張りたい。

## <展開>

普段から接する教師を最初にお客として呼び、その後に登下校の安全サポーターを呼んだところ、どの児童も最初から姿勢や声の大きさなどの目標を意識して活動できた。さらに、活動の途中で失敗しても、気持ちを切り替え、次の仕事で挽回しようとする事ができた。

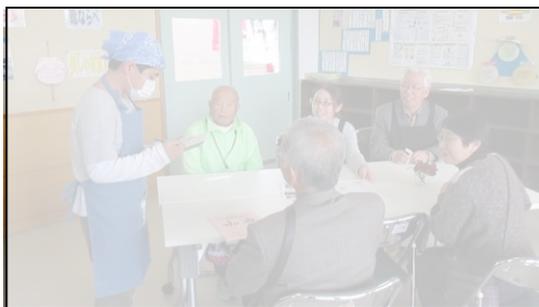


図10：活動の様子

## <事後>

VTRを用いて、販売会の振り返りをしたところ、児童は次のような内容の反省をした。

- ・皿を置くときに、大きな音を立ててしまった。置き方を練習してもっと上手になりたい。
- ・姿勢に注意できた。次もがんばりたい。
- ・おしぼりをお客に持って行くのを忘れたので、次は注意したい。

また、図11のワークシートを用いた評価の比較で、児童は次のような感想をもった。

- ・次は先生に清潔で「◎」をもらえるように頑張りたい。
- ・次に頑張りたいことが決まった。

きょうのふりかえり(◎:よくできた ○:できた △:もうすこし)		じぶん	先生
<input type="checkbox"/> せいけつ		○	◎
<input type="checkbox"/> ことばづかい		○	◎
<input type="checkbox"/> おもてなしのこころ、えがお		○	◎

図11：ワークシート③

## ⑤結果

事前では、VTRで過去の活動を振り返ったことで、児童は自分の課題を踏まえた上での目標設定ができた。

活動中は、安心して接することのできる人物から接客することで、自信をもって活動に取り組むことができた。

事後での振り返りでは、「もっとうまくなりたい」「もっとできるようになりたい」という思いをもつ児童が増えた。さらに、自分自身の評価と教師の評価との比較では、自分の頑張れたことを再認識したり、次に頑張りたいことを決めたりすることができた。

## 8 考察

実践2から、児童が自ら活動に取り組み、力を発揮するためには、安心感をもてる環境が重要であることが分かる。したがって、理論モデルの「事前段階」「遂行段階」「事後段階」はそれぞれ、安心できる環境であること、または児童が情動的喚起によって自己効力感を得られる環境の中にあると成り立つといえる。

### ①事前段階

ICTの活用や友達の活動の様子を見ることなど、視覚支援が有効であった。VTRを見ることで児童は自分の姿を客観的に見ることができるようになり、過去の成功経験を再認識したり、自分の課題を振り返ったりすることができた。

実践1のように、過去の成功経験は「できそうだ」という自己効力感につながり、児童は自らやってみようとする事ができたが、実践3のように過去の失敗経験も「うまくなりたい」という学習意欲につながり得ることが分かった。

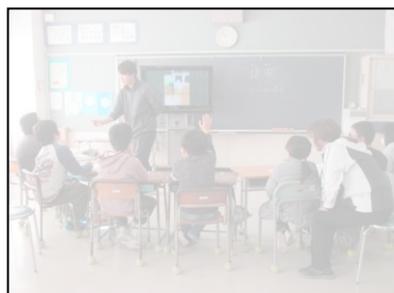


図12：過去の活動を振り返る様子

### ②遂行段階

実践1、2から活動の難易度や自由度が児童の意欲に大きな影響を与えることが分かる。したがって、児童の状況を見て、柔軟に目標や計画の変更を行うことが大切である。

また、実践1では教師の励ましや称賛も児童

の意欲に影響を与えた。少しでも進歩した点については称賛し、「こんなこともできた」という自己の努力・結果に対する評価につなげられるようにしていくことが大切であろう。

### ③事後段階

「うまくできた」という成功経験は、成功感・達成感につながり、さらに成功経験を繰り返し積んでいくことで、「またできるだろう」という、その後の活動の遂行可能感の向上につながった。つまり、「遂行行動の達成」とは、成功体験を積むことであり、これは自己効力感を向上させるための情報源として非常に強力であることが分かった。

一方で、「達成度の評価」などの自己評価の場面では、自分のことを客観的に見る力「メタ認知」が必要となるとともに、実践3のような児童の自己評価を児童にとってより確かなものにする為の教師による適切なフィードバックが有効となる。したがって、ここでは児童のメタ認知を支えるための視覚的な支援や児童の実態や様子を正確に見取る教師の力が求められた。

## 9 成果と課題

### ①成果

本実践を通して、児童は他の場面でも自分から活動に取り組むことが増えてきている。これは、成功経験を繰り返し積んできたことや過去の成功経験と新たな学習とをうまくつなげられるようになった結果である。また、活動について達成度を評価する時間を設定するとともに教師からのフィードバックを行ってきた成果であるといえる。

このように、成功経験の積み重ねは、自己効力感の向上に直結しており、心理学者アルバート・バンデューラが提唱する自己効力感を高めるための4つの要因のうち、「遂行経験の達成」は最も効果的であるということが分かった。

### ②課題

遂行行動の達成を成り立たせるためには、活動内容を理解する児童の「理解力」や自己評価

を行うための「メタ認知力」、安心できる材料(代理的体験, 言語的説得, 環境の調整など), 教師による適切なフィードバックといった, さまざまな力や要件が必要になる。本研究では, TVやタブレットPCといったICT機器の活用やワークシートの活用など, 理解力やメタ認知力を高めるための支援を行ってきたが, こういった力や要件は, 一つの学習によって形成することは難しく, あらゆる学習の中で系統的・継続的に行っていく必要があることが分かった。

また, 本研究では, 児童の自己効力感を高めるための要件や支援について明らかにできた一方で, 教師の児童の実態や様子を正確に見取る力・方法に課題が残った。いかにして児童の実態を見取り, 児童の気持ち・考えに寄り添ったフィードバックを行うか, その手立てや支援の方法などについて考えていくことが課題である。

#### <引用文献>

[1] 文部科学省：中央教育審議会答申 2016

#### <参考文献>

[2] アルバート・バンデューラ：「激動社会の中の自己効力」 金子書房 1997

[3] 三宮真智子：「メタ認知—学習力を支える高次認知機能」 北大路書房 2008

[4] 宮城県立角田支援学校：「かくよう第三十二集」 2015

[5] 宮城県立角田支援学校：「かくよう第三十三集」 2016

[6] 宮城県立角田支援学校：「かくよう第三十四集」 2017

[7] 文部科学省：小学校学習指導要領解説 2017

別紙1 ワークシート

**かもめ商店** 「うんどろかいのけいひん」

( )年 名前

○ノートに シールをはる  
○クラスごとに まとめる

(1) ひづけ

(2) ばしよ

(3) おきやくさん

(4) めあて

きょうのふりかえり (◎:よくできた ○:できた △:もうすこし)

	じぶん	先生
<input type="checkbox"/> シールのはりかた		
<input type="checkbox"/> ノートのまとめた		
<input type="checkbox"/> やくわり ぶんたん		

かつどうの はんせい

ワークシート：かもめ商店

マーケット  
**かもめMarket** 「接客について考える」

月 日( ) ( )年 名前

今日の目標  目標

「接客」ってなにをするの？

あなたはおきやく様が楽しく買い物するために何ができますか？

はんぱい会の目標

ワークシート：接客について考える

**かもめカフェ ①** 「ことしのかもめカフェについて」

( )年 名前

今日めあて

(1) いつ?

(2) どこで?

(3) おきやくさん

(4) しごとについて

かさわしマーケットの <u>はんせい</u>	ことしのかかり
<input type="text"/>	<input type="text"/>
<input type="text"/>	<input type="text"/>

( )かかりのポイント

ぼく・わたしのもくひょう

ワークシート：ことしのかもめカフェについて

**かもめカフェ ⑦** 「ふりかえりをしよう①」

( )年 名前

今日めあて

きょうのふりかえり (◎:よくできた ○:できた △:もうすこし)

	じぶん	先生
<input type="checkbox"/> せいけつ		
<input type="checkbox"/> ことばづかい		
<input type="checkbox"/> おもてなしのころ、えがお		

きょうのかんそう

ワークシート：ふりかえりをしよう①